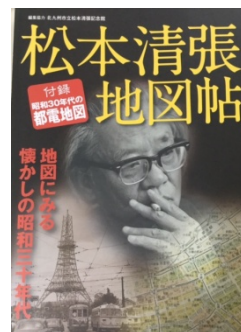


## 松本清張地図帖

表題は帝国書院から 2010 年刊行の地図帖である。副題は「地図にみる懐かしの昭和 30 年代」とある。松本清張の主な作品（推理小説）が地図などで解説。ページをめくるだけで引き込まれる。若いとき清張作品に凝り、数多くの小説を読んだ。推理小説だけでなく、歴史小説や評論、とりわけ「戦後史」関係に興味をもった。ここでは本書のなかで印象に残る作品を紹介したい。



まずは『砂の器』から — 5 月のある朝、蒲田操車場で中年男性の扼殺死体が発見される。身元を表すものはなく、顔も潰されている。前夜、近くのトリスパーで被害者らしい男と連れ若い男が東北訛りで「カメダ」を話題にしていたことが判明。地図上に「羽後亀田」を見つけた今西刑事は秋田に向かう。収穫はなかったが、ヌーボー・グループと出会う。そして7月、被害者の身元は三木謙一と判明する。東北方言と似た出雲弁を使う島根の亀嵩で巡査の経験があり、誰にも親切な男だった。8月、週刊誌で列車の窓から紙吹雪を飛ばす女の記事を読んだ今西は、中央線沿線で13枚の布片を拾い、血痕を採取する。それを撒いた前衛劇団の事務員・成瀬リエ子は自殺し、その経緯を知る宮田邦郎も死体で見つかる。しかし今西は、三木の立ち寄った伊勢の映画館で重要な手がかり写真を発見した。ヌーボー・グループの一人、音楽家の和賀英良の姿だ。和賀と三木には、23年前に亀嵩での接点があった。和賀は本名木浦秀夫で、戸籍を偽造していた。秀夫は、病に苦しむ父との放浪中に亀嵩で三木と出会っていた。すべては、和賀による、現在の名声と大臣の娘との婚約という栄光を忌まわしい過去によって失いたくないための犯行だった。

この作品は映画にもなり、大きな反響を呼んだ。「カメダは今も相変わらずでしょうね？」被害者の連れは、被害者にそう東北訛りできいた。松本清張は、東北弁と出雲弁の類似と両地域に存在する「カメダ」をモチーフにして本作を構想した。「亀田と亀嵩」から物語が始まるところが、なんとも面白い。

和賀英良、本名木浦秀夫の父は、ハンセン病を患っていた。父との放浪中に亀嵩で三木と出会う。ハンセン病は「らい病」と呼ばれ、昭和28年の「らい予防法」（新法）でも、隔離政策が維持され、平成8年の同法廃止まで継続した。ハンセン病に罹患した人は、療養所に送り込まれる「隔離対象」とされた。この作品では放浪生活続ける親子を描いている。清張は日本の差別、ハンセン病の差別問題から、「忌まわしい過去が露呈すれば、現在の栄光はすべて砂の器のごとく崩れ去る」というテーマに迫った。

(2016年5月15日)